

第二四回光華講座

親鸞聖人の往生観

—往生から願生へ—

大谷大学名誉教授

寺川俊昭

一、**往生理解の混乱**

寺川でございます。「親鸞聖人の往生観——往生についてのご了解——」、「こういう視点から親鸞聖人の教えを、お集まりの皆様方と一緒に尋ねる機会をいただきましたことを、大変ありがたく存じながら伺ったことでもあります。「親鸞聖人の往生観」、つまり往生についてのご見解という題がありますが、考えておりますことは、親鸞聖人という方は念仏する仏者として生きていかれた方でありませうけれども、念仏者はどういいう生き方をするのであるかという大切な問いが、そ

ここにありますが、それを考えていこうとしますとき、親鸞聖人がお持ちになった「往生」の了解が、これと重なりあうのです。それで親鸞聖人が「往生」をどうご了解になったか、ここから尋ねていきたい、こういう趣意でございます。

親鸞聖人がいわゆる「我が信念」としてお持ちになり、身をもって生きていかれた仏道を、聖人ご自身が「浄土真宗」という言葉で表明なさっております。浄土の真宗と表明なさったことでありますから、「浄土」という言葉がよく表しておりますように、「往生浄土」ということが、浄土真宗においては根本的な意味を持つ大切な事柄である、これは誰が考えてもすぐわかるとおりですね。往生を考えないで浄土真宗を尋ね、了解することはあり得ない。往生とはこういう大切な事柄であると、まず承知することにあります。

その往生もしくは往生浄土につきまして、親鸞聖人は独自の、というよりも独創的といった方がいいかと思いますが、まことに特徴的な見解をお持ちでありました。それを尋ねていきたいと存じていることでもあります。それにつきまして、平成元年でありますからもう十数年たちますけれども、岩波書店が「仏教辞典」を刊行なさいました。その中に、「親鸞」という項目、そして親鸞聖人の主著である「教行信証」という項目がございます。その項目の解説を担当された方が、次のような解説をお書きになっております。要点だけを申し上げますと、「親鸞は他力信心による現世での往生を説いた」。いま一つの方は、「親鸞は他力信心による現世での往生成仏を説いた」。こういう解説がなされているのです。

それについて西本願寺のご当局が、岩波書店に訂正の要請をなさいました。平成二年ですから、

刊行されて半年くらいたった頃であったかと思えます。つまり直ちにということです。その訂正のご要請は、「他力信心による現世での往生を説いた」というのは十分ではない。確かに親鸞聖人は現世での往生を説いたと理解される文章もあるけれども、命終の後、往生を遂げる。こう読まれ了解すべきお言葉もずいぶん多く書かれています。現世での往生を説いたというだけでは、事の半分だけであって、残りの半分の、命終の後に往生を遂げるという見解も、親鸞聖人は確かに述べておられるのであるから、それを補ってほしい。それから「現世での往生成仏を説いた」というこの解説は誤りであるから、削除してほしい。もちろん「現世での成仏」というのが問題なのです。この二つを内容とする訂正の要請をなさいました。

西本願寺は以前にも、「他力本願」という言葉を、ある大臣の方が公の場で、不適切な了解でお述べになったことがあったときに、「真宗に対する無理解と侮辱であるから、撤回してほしい」と、直ちに強い意思表示をなさいました。そういう点では積極的で真剣な姿勢をお持ちであります。それは感銘を受けることでありますが、岩波の「仏教辞典」と言いますと、幅広く使われ、しかも権威のある内容であるという信頼がありますから、社会的な影響が大きいですので、訂正の要請をなさったかと思えます。その結果は、何年か後に第二刷が出ておりますが、「一度出したものは訂正をしない。けれども要請はごもつともである面があるから、補正をする」というので、第二刷には補足がつけられております。ところが西本願寺から解説の内容について訂正の要請があったことが、新聞に報ぜられました。真宗にとっては大切な事柄でありますので、多くの心ある方が出版社の岩波書店に、あるいはその監修を、もう亡くなられた中村元先生が担当なさって

いましたので、監修者の中村元先生のところへ、往生理解についてのさまざまな見解が数多く寄せられたそうです。五〇数通であったようですが、中村元先生は大変几帳面で真面目な方でありますので、「真宗信仰にとって大切な事柄であり、しかも真剣な見解をお寄せいただいたのであるから」というので、中村先生が主宰なさっていました東方学院という研究所、それはインド学、仏教学の研究機関であります。そこから「東方」という研究所報が刊行されております。その第5号に、寄せられた見解を整理して、「こういう真剣な見解が多くの方から寄せられた」と、代表的なものをまとめて発表なさっております。

それを読みますと、真宗の関係者が往生について意見を言う時には、ことは信仰にかかわっておりますから、「真宗ではこう言う」というのではなくて、「私はこう信ずる」という強い主張になります。それで、さすがの中村先生も持て余されて、お手上げの感じでした。しかし丁寧によくおまとめになっております。題は、「極楽浄土にいつ生まれるのか——『岩波仏教辞典』に対する西本願寺派からの訂正申し入れをめぐる論争——」となっております。皆様どう思われますか。極楽浄土にいつ生まれるのか。この題を読んで、私はこれはだめだと思いました。なぜならば、親鸞聖人はお浄土を表すときに、「大経」に基づく「安楽」もしくは「安養」という言葉をお使いになって、「観経」に由来する「極楽」という言葉はお使いにならないのです。親鸞聖人は、浄土と言うけれどもそれは単純ではない。すこし複雑になりますけれども、言葉だけ最初に申し上げますと、「真実の浄土」と「方便の浄土」・「仮の浄土」を区別なさるのです。私たちに「信心において開かれてくる浄土」と、「浄土に生まれたいと願っている浄土」、この二つの

意味が、浄土にはある。後者の方を「化土」と言います。親鸞聖人は浄土について、「真実の浄土」と「仮の浄土」もしくは「化土」、この二つの意味の違いがあることを、大切な浄土理解の根本問題としてお述べになるのです。真実の浄土を安楽あるいは定養と表し、極楽というのは、化土を表す言葉なのです。ですから「極楽浄土にいつ生まれるのか」と言えば「化土にいつ生まれるのか」ということになり、それは死んでからに決まっています。日本の仏教研究を代表する中村元先生が、往生という大切な問題を考えるとき、「極楽浄土」とおっしゃるのは、親鸞聖人の浄土理解についてご存じなのか、それとも配慮してお使いになったのかは知りませんが、どうもご存じないのではないかと思つて、非常に残念な印象でした。

しかしながら、寄せられた見解は真剣です。そこで、多くの方がお寄せになった見解を拝見いたしますと、「岩波の『仏教辞典』の解説は、まあこんなものだろう。大体、これでよからう」という見解と、「西本願寺の訂正要請の方が適切である。だから往生を現生で語ることに、これは問題がある」という見解に分かれております。「大体、こんな了解でよからう」というのは、大谷派の関係者から寄せられた見解のようでした。「解説に問題があるから、西本願寺の要請されたように改めるべきである」という見解に賛意を表されるのは、大体、ご本派の関係の方々が多いようでございました。これは極めて自然のことですね。それを読んで改めて感じましたことは、多くの方が解説の「他力信心による現世での往生を説いた」ことについて、是か非かという見解をお述べになっています。しかし「現世」という言葉は、親鸞聖人はほとんどお使いにならないのです。一回だけお使いになるのは、「現世利益和讃」だけです。そうではなくて、基本的には

「現生」なのです。それで、「往生は現生のことなのか」、それとも「命終の後、死んでから後のことなのか」。どちらが親鸞聖人の往生理解として適切であるか、こういう見解に分かれております。つまり往生理解について、現在でも一義的に明確で、誰にとっても「往生というのはこういうことである」と、共有された了解はないのです。往生は現生のことか、それとも命終の後のことか。それぞれ理由がありますけれども、そういう意味で往生理解が混乱しているという印象を、新たにしましたことでありました。

ところがさらに現在は、往生の理解について今一つの難しい問題があります。今日お集まりの皆様方は、言葉を挙げればおわかりだと思えますけれども、専門の言葉で「輪廻転生」、命がさまざまな境界を、さまざまに形を変えて、めぐって行く。六道に輪廻する。輪廻転生するという転生の生命の理解がございませう。もつと素朴で、しかしよく使われる言葉で言えば、あの世に生まれていくということ。新聞等に報道される場合、「あの世」というのは通俗的に過ぎるものですから、「天国」という言葉をよく使います。死んだらどうなるのか。天国に生まれていく。これは大体マス・メディアが共通に使っている表現でしょう。では「天国はどこにあり、どういう世界であるのか」と聞くと、「さあ？」というだけであって、見てきた人もいなければ、こういう世界だという規定もありません。ただ漠然と、死んだものが行くところが天国であるといっているだけです。「歩行者天国」という言葉もありますが、そういうような極めて曖昧なままに、「天国」という言葉で「あの世」という言葉が表す世界を言い、命が終わったら天国に生まれていくと言っております。交通事故で親を亡くした子どもさんたちが、亡くなった親

を思う文章を書かれた。それをまとめて本にして出されたのですが、その本の題が「天国にいるお父ちゃんへ」でした。親を失った子どもさんの純な気持ち、それは大切ですけども、亡くなったお父ちゃんたちが天国に行っているというのは、甚だ迷惑な話であり、不見識ですね。真宗の門徒も、天国に行くのでしょうか。

あの世に生まれていくというとき、どこに生まれ変わっていくのでしょうか。その「どこに」という世界を、中国以来六道と考えるきました。「六道」というのは、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天という、六つの境界をいいます。どこへ行くかは、行なった行為によって、その報いとして決まってくるのだと説明され理解されてきました。この「転生」と浄土教という「往生」とが、ほぼ同じように理解されてしまうという問題があるのです。けれども往生というのは、輪廻転生する迷いの命のあり方を越えていくことです。そうでないと、往生浄土になりません。あの世に生まれていくというのは、覚りを得たとか救いを得たということとは違いますから。往生は転生を克服する生命理解なのです。それがほとんど混同されたままで、往生理解が通俗化してまっております。往生そのものの了解が混乱しておりますし、それに加えて転生と区別されないままに往生が理解される。二重の混乱状態だと感ぜられるのが、往生の理解をめぐって現にある事態であります。

二. 聖人における往生の吟味

そういう「往生理解」の混乱は現在も顕著でありますけれども、考えてみると、現代だけではなく、親鸞聖人が生きておられた二三世紀の日本にも、同じような了解の混乱があったであろうと考えられます。そういう中で、浄土真宗において極めて大切な意味を持つ往生を、自覚的にとらえ了解していききたいのだ。通俗的な往生理解ではなく、仏道としての往生とはどういうものであるかを、明確にしていきたい。親鸞聖人は、おそらくこういう課題感を強くお持ちになりました、往生理解の吟味とおしながら、ご自分の独特の往生理解を鮮明にしていくという仕事を果たしていかれました。それが「三往生」の見解であります。この往生についての混乱した了解を吟味しながら、独自の「仏道としての往生」を明らかにするという仕事を、親鸞聖人は基本的に「教行信証」でなさっております。幸い真筆の「教行信証」が、東本願寺に伝承されております。あれが書き上げられたのが親鸞聖人が七四、七五歳の頃であろうと推測されておりますが、それを踏まえて晩年、八三歳の時と八五歳の頃に、往生だけを主題とする論文を改めてお書きになりました。それが「浄土三経往生文類」と「如来二種回向文」という題の論文であります。題が示すとおり、これは「往生」を主題とする論文であります。そこに聖人独特の往生についての見解が、はっきりと表明されていきます。ここで親鸞聖人は往生を三つの意味で了解され、語られる。そして往生観を吟味し整理して、三種類の往生理解があるというべきであろうという見解を、

お示しになります。

往生と言っても、一義的に決まっているわけではない。ある場合には「大経往生」と言うべき往生理解が語られ、また「弥陀経往生」をもってそれを語るといふ場合もある。「観経往生」と性格づけるべき往生観を持ち、それを往生として語るといふ方もおいでになる。このように往生の理解を三つに分けになるのです。「浄土三部経」によって往生の了解を性格づければ「大経往生」ないし「弥陀経往生」と呼ぶことができるであろう。その往生をまた違った視点から、「大経往生」を「難思議往生」と呼び、同じように「観経往生」と呼んだ「往生」を、その性格から「双樹林下の往生」という言葉でも表すことができる。「弥陀経往生」については「難思議往生」、このように性格づけていこうとおっしゃるのです。往生と言うけれども、どの立場に立って、どういう往生理解に立って、あなたは往生を語っておられるのか、この吟味が必要である。自分は往生のあり方を三種類に分けて了解するのだけれども、ではあなたはどの往生理解に立つのかと問われるならば、自分は大経往生、つまり難思議往生に立つのであると、はっきり明言なさるのです。自分が往生を語る時には、難思議往生の了解に立って申し上げる。観経往生、弥陀経往生の立場に立ってではないと、はっきりお述べになるのです。

【教行信証】の「化身土巻」に関心のある方はご存じだと思いますが、普通「三願転入の文」と理解される述懐を述べた文章があります。そこにしるされている言葉ですが、観経往生については「永く離る」。弥陀経往生については、「速やかに離る」。難思議往生については「遂げんと欲う」とおっしゃっています。「自分は難思議往生の立場に立ってそれを生き抜いていきたいと

願うのである」、こういう文脈なのです。そこに立って、それを生きて行きたいと自分は強く願うとおっしゃる往生の了解は、「難思議往生」・「大経往生」でありますから、親鸞聖人が主体的に、そして積極的にお持ちになり、そこにお立ちになった往生理解は、あれこれ疑問の余地はありません。難思議往生であることは、よく腹に入れて承知すべきであります。

「教行信証」の「行巻」を見ますと、言葉だけを挙げることをお許しただきたいのですが、「浄土真宗において往生を語る場合、難思議往生としてである」と、はっきりとお述べになっております。往生には三つのあり方があるのだけでも、本願の仏道である浄土真宗において往生を語る場合には、難思議往生としてであると、はっきり明言なさる。さらに「難思議往生」とは、どういう往生であるか、これを主題的にお述べになるのが、「教行信証」の「証巻」です。その最初の見出しのところに、ふつう標拳と呼んでいますが、「証巻」の主題を表す言葉が掲げてあります。必至滅度の願、難思議往生とあります。この必至滅度の願の意を尋ねるのが、「証巻」の主題である。同時に難思議往生を主題として、自分の了解を述べるのであると、はっきりお述べになっております。「証巻」の内容に「難思議往生」があるわけですから、「化身土巻」の「速やかに難思往生の心を離れて、難思議往生を遂げんと欲う」という表白と呼応して、親鸞聖人がお立ちになり、身をもって生きていこうと願われた往生は、難思議往生であると了解しなければいけません。往生について親鸞聖人は三種類のあり方があることをはっきり区別して示され、「自分は三種類の往生のあり方の中で、親経往生の立場に立ったこともあり、難思往生の立場に立ったこともあったけれども、今、自分は難思議往生の立場に立って、この難思議往生を身をも

って生きていきたいと願うものである」と、表明なさっている。それが聖人の往生についての基本的な姿勢の表明である。こう承知することができます。

三、「浄土三部経」に説かれる往生

それでは難思議往生はどういう内容の往生であるのか。これを私たちは聖人にしたがつて尋ねていきたいと存じます。この「浄土三経往生文類」でも、親鸞聖人も「浄土の三経」ということをお挙げになっています。往生を仏道の大切なあり方として説く教え、その最も大切なものとして「浄土の三経」がある。これをお示しになっているわけです。ところがその「浄土三部経」を選びとられたのは、ご存じのように法然上人であります。法然上人はたくさんのお切な大乘の経典の中から、「まさしく往生浄土を明かすの経」として、「仏説無量寿経」「仏説観無量寿経」「仏説阿弥陀経」、この三つの大乘経典を選びとっていかれます。その選びとりの示唆を与えられたのは、曇鸞大師です。大師は「論註」に、

釈迦牟尼仏、王舎城および舍衛国にましまして、大衆の中にして、無量寿仏の莊嚴功德を説きたまう。すなわち、仏の名号をもつて経の体とす。後の聖者・婆藪槃頭菩薩、如来大悲の教を服膺して、経に傍えて願生の偈を作れり。

と述べていますが、この大師の見解から大きな示唆をえながら、法然上人は仏道を明らかにするたくさんのお切な大乘の経典の中から、往生浄土こそ、凡夫に開かれた大切な仏道であるが、これを説

いているお経が三つあるとし、それが「大経」「観経」「阿弥陀経」であると、選びとられたのです。当然往生ということは、この三つの大乘經典に丁寧の説かれております。

それによつて見ますと、まず「大経」が往生を、往生する姿を、そして往生する人を、大切に説いております。浄土に往生していくこと、その人、その仕方をつぶさに見ると、三種類ある。上輩、最も優れた往生を遂げる人たち。このように上輩、中輩、下輩の三種の往生、往生を遂げる姿、往生していく道、これが現にあると説いている箇所があります。「大経」の三輩章と呼ばれる部分です。同じ趣旨で、この三輩の中を三つに分けて、往生を遂げていくそのあり方、内容、そして人間の違いが細かく言うところと九通りに区別されるべきであるとして、有名な「上品上生」から「下品下生」の往生まで丁寧に説いておりますのが「観経」です。そして例えば浄土宗でお葬式の時、亡くなった人を前にして棺前のお勤めをしますでしょう。その時に導師が、「願わくは如来の来迎をいただいて、上品上生の往生を遂げられますように」という言葉を、亡くなった方へ贈る儀式をなさる場合もあります。遂げるのならば、上品上生の往生をこそ遂げたい。今、亡くなったあなたも、どうか上品上生の往生を遂げられますように。これはよくわかる気持ちですね。

法然上人に深く帰依した人に、熊谷蓮生がおります。あの熊谷直実の変わり果てた姿です。ところが熊谷蓮生は淳な人でありました。さすがの坂東武者も歳をとって弱りまして、「死ぬのではなからうか」と思うようになったのです。その時に彼は、「遂げるのならば、上品上生の往生をこそ遂げたい」と、強く思ったのです。それでだんだん死期が近づいたような気持になって

きた頃、そこが伝説ですから本当かどうか知りませんが、周りの人へ、「某月某日、私は往生を遂げるのだが、いつも言うているように、上品上生の往生を遂げたい。どうか見に来てくれ」と、触れ回ったというのです。皆が「それは結構なことだ、見に行こう」と、熊谷蓮生が指定した日、現在の円山公園のどこかだろうと思いますが、鳥辺野の桜の木の下に筵を敷いて、沐浴をして体を清め、浄衣を着て、「本日こそ、往生を遂げる」と座り、「なんまんだぶ」と念仏を始めたのです。皆がぞろぞろ集まって、「さぞ立派な往生を遂げるであろう」と期待しておりましたが、「なんまんだぶ」という声が続いても続いて、一向に死ななかつた。蓮生はこれはいかんと思ったのでしょう。「今日はだめだ。やり直しだ」と言って、筵を巻いて帰ったのです。それで集まった皆が、「口ほどにもない」と罵った。ところが暑い夏も終わりました涼風が吹くようになり、蓮生もまた「終わりだ」と感ずるようになったのでしょう。「何月何日、往生を遂げるから見においで」と、同じことをまたやったのだそうです。皆が、「今度は本当に往生を遂げるかどうか見に行こう」と集まりました。蓮生が筵の上で姿勢を正して「南無阿弥陀仏」と念仏する姿を見て、見事に往生を遂げられるか、どうかと見ておりましたら、念仏する声がだんだん小さくなり、やがて念仏の声が途絶えた。その時に蓮生は命終わった。集まった人たちは、この前は悪口を言ったのを忘れて、「見事な往生であつた」と感銘したという伝説があるのです。鎌倉武士の変わり果てた姿ですが、人生を徹底的によく生き抜いて、「上品の往生」をこそ遂げたいのだというその熾烈な宗教的要求の、一つの個性的な表現でありまして、感銘を受ける話です。

「遂げるのならば、上品上生の往生を遂げたい。しかしながら自分が生きてきた人生を振り返

ってみると、大きな後悔が身を責める。自分は生涯、ついに一つの善も行なうことができなかった。悪に悪を重ね、罪に罪を重ねて生きてきてしまったと思う。「正信偈」に道綽禪師の言葉として、「一生造悪」という痛みが述べられておりますね。「一生、造ってはならないと承知しながら、悪に悪を重ね、罪に罪を重ねてきてしまった。取り返しがつかない。その痛みが身を責めて、仏様を思いながら命を終わりたいけれども、仏様を思うことができない」。そういう人に対して善き友が、「仏様を思うことができないのであれば、せめて仏様の名を称えなさい」と励ましてくださる。その励ましをいただいで、「南無阿弥陀仏」と仏様の名を称えながら命を終わっていく。そういうのが「下品下生」の往生人です。さまざまな往生を逃げていく人の姿と往生のあり方、これを「観経」が丁寧に説いているわけです。読めばいかにも感銘が深い。「人はこのように命終わっていくのか」と教えられる、大切な教えですね。

そういう往生について「阿弥陀経」に有名な言葉がありますから、それを申してみますと、

舍利仏よ、若し善男子善女人ありて、阿弥陀仏を説くを聞きて、名号を執持すること、若しは一日、若しは二日、若しは三日、(乃至)若しは七日、一心にして乱れざれば、その人、命終の時に臨みて阿弥陀仏、諸々の聖衆と、現じてその人の前にまします。この人、終わらん時、心、顛倒せずして即ち阿弥陀仏の極楽国土に往生することを得ん。

こういう言葉が「阿弥陀経」にございますでしょう。「大経」の三輩の往生について、また「観経」の「九品の往生」について、そこに説かれている「往生」は、「命終わらん時に、心転動せずして極楽世界に生まれていく」、こういうように教えられております。「命終わるの時に臨ん

「で」ですから、往生を遂げる時といえますと、「命が終わる時、極楽浄土に生まれる時をいただくのだ」となるのでしょうか。一貫してこういうように往生が説かれているのです。この「往生浄土」を大切に教えたお経が、「浄土三部経」であります。「浄土三部経」は、一貫してこういうように「往生」を説いているのです。したがって当時の人は、そして現在でも、浄土に生まれていく時はいつなのかと問えば、命終わる時、この世の命終わった後、死んでから後、浄土に生まれていくのだ、こういう往生理解が持たれたのは極めて当然です。生きている人間は、どんなにいい人だ、立派な人だと言われる人でも、生きておれば凡夫の姿をさらけ出しますから、とても浄土に生まれたというわけにはいかない。この世は穢土であって、浄土ではない。だから浄土に生まれる時は、この世の命が終わった後だと理解するのは、極めて自然でもあります。のみならず、お経もそのように教えているわけです。これが幅広く、遠い昔から現在まで持たれている往生理解の基本であることは、間違いがありません。

四・本願の成就を説く「大経」の教言

ところが親鸞聖人は、それに対して「大経往生」とおっしゃるのですけれども、「大経」の三輩章とは別の教言によって、往生を了解していかれたのです。「大経」によって往生を尋ねれば、ふつうには下巻のはじめにある三輩章によって理解するのです。またそれが無理のない、「大経」から往生とはどういうことであるかを学ぶ姿勢でもあるのです。ところが親鸞聖人は三輩章では

なくて、「大経」下巻の最初に本願成就を説く大切な教えが述べられますが、これによって「仏道としての往生」はこれだという確信をお持ちになっていったと思われまます。ゆっくり読むべきですけれども、今、事柄だけをあげますと、下巻の最初に、三つの「本願の成就」が説かれております。ここに親鸞聖人は、「大無量寿経」の最も大切な教えを聞き取っていかれたのです。

皆さんがお目になさる真宗の本には、「必至滅度の願」は第一一願と書かれるのが普通です。「諸仏称名の願」は、第一七願、「至心信樂の願」は第一八願です。番号で言えば一一願、一七願、一八願、この三つの本願の成就を説く教言がしるされています。それについてお考えいだだけばと思いますが、親鸞聖人は本願をおっしゃる時に、番号でおっしゃることはないのです。必ず願名をあげられるのです。「大経」に法蔵菩薩の本願が四八の内容で、お釈迦様によって説かれておりますが、その一一番目にあるから第一一願と呼ぶのです。しかし第一一番目の本願といっても何のことかわかりません。一八願というありがたいような気がするけれども、それはよく聞法なさった人であるからおわかりなので、普通の人に一八番目の本願と言っても、何のことかわからない。「歎異抄」が伝えている、聖人の感銘深い述懐がございませうでしよう。

聖人の常の仰せには、弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。さればそくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんと思しめしたちける本願のかたじけなさよ、とご述懐候いし。

この述懐がよく伝えているように、親鸞聖人は、本願を思われる時には、「ありがたい」という思いがまず強く動いていたに違いありません。「ありがたい」と思うその感銘を抜きにして、親

鸞聖人は本願について語られることはなかったであろうと思われます。たくさん重い業もって生きるこの私を、たすけようと立ち上がってくださいました如来の本願があるのかという感銘を、聖人は強く持たれております。だから本願を言うとき、例えば「一番目の願」というのは何だか意を得ないですね。だから「必至滅度の願、つまり無上涅槃の証りに至らしめる本願」、「諸仏が如来の名をほめたたえられる本願」、あるいは我々きいたくない心を持って生きるほかはない者に對して、如来の本願が真実であることを深く信じて疑うな。この心をもって安樂淨土に生まれんと欲え、こう呼びかけてくださる本願。こういうように、願のこころを表すのが願名ですから、聖人は本願を語られるときに番号で言わないで、必ず願名で示されます。このことは、よく知っておくべき大切なことです。第一八の本願ではなく、至心に信樂して我が国に生まれんと欲えと、私たちに呼び続けに呼んでくださっている大悲の本願、こういう本願理解を大切になさるから、本願を必ず願名で表されるのです。

第二番目には、親鸞聖人が本願をおっしゃるときには、本願の成就に注意して語られます。これが大切な特徴です。本願といいますと、普通には「大經」に、「たとい我、仏を得たらんに」と説かれている、この言葉に始まる法蔵菩薩の本願の心において本願を理解することが、多うございます。例えば諸仏称名の願で言えば、

たとい我、仏を得たらんに、十方世界の無量の諸仏、悉く吞嗟して我が名を称せずば、正覺を取らじ。

こういう言葉でお釈迦様が教えてくださった、法蔵菩薩の本願の心において本願を理解するのが

普通なのです。ところが同時にお釈迦様は、そういう言葉で表される諸仏称名の願が、この世の出来事になって実現している。それを「成就」としてお説きになります。それは、

十方恒沙の諸仏如来、みな共に無量寿仏の威神功德不可思議なるを讚嘆したまう。

目を見て見ましよう。数えきれないほどのお方が、立派な人も、どうであらうかという人生を送った人も、さまざまな人が、その人生を引つ提げて、如来のご恩のありがたいこと、お念仏の尊いことを語り示しておいでになるではないか。私は愚かな身であるけれども、このようにお念仏によって救われた。そういう感謝と喜びを、どれだけの人が熱い思いで述べておいでになるであろうか。これが「諸仏称名の願」が、この世に実現しているその形なのだ。本願というのは、法蔵菩薩の願として「大経」に、お釈迦様によって説かれているだけではなくて、この世の出来事になって実現しているのだ。

本願には、そのように両面がありますが、親鸞聖人は後者の、本願をその成就において了解するのが先なのですね。

具体的に申しますと、諸仏称名の願の成就是、親鸞聖人にとりましては、師法然上人が念仏の信を語っている、その事実なのです。聖人が法然上人を訪ねて、その懇ろな教えに励まされて念仏の身となったのは、二九歳の時でありました。聖人は生涯で一番苦しんでおられた頃、六角堂に百日の参籠をなさった。その参籠の中で夢のように聞いた聖徳太子の言葉に励まされて、吉水に法然上人を訪ねていかれます。その法然上人の姿を見、その信念を語る言葉に深い感銘を覚え、その感銘に励まされてまた百日の間、一日も欠かすことなく吉水に法然上人を訪ねて、ひたむき

にその念仏往生の信念を語られる言葉聞き、そして「承り定めた」。そのとおりだという、大きな決着を得られた。そして「南無阿弥陀仏」とおおらかに念仏する人になっていかれました。これがよくご存じの、聖人が救いをただかれた体験ですね。その親鸞聖人にとって、吉水で老念仏者・法然が、倦むことなく「我等は愚かな凡夫だ。その愚かな凡夫である我々が、如来の本願によつて、念仏して浄土に生まれる人生をいただくことができるではないか。この如来のご恩を思おう」、こういうことを語り続けている。それに非常な感銘を覚えられたのです。この世の中には、偉いことを言う人はたくさんおられるけれども、それ以上に、愚痴をこぼす人は多い。その中であつて法然上人は、「我々は愚かな凡夫だ。それをよく知つて、愚かな身にかげられた大悲がある。大悲は何を求めるわけでもなく、ただ一つ、如来の名を称えよ。たとえ一言でもいい、南無阿弥陀仏と称えよ。本願があるのだ。本願によつてわれらは必ず浄土に生まれていく人生をいただくことができるのだ。私もその喜びを確かにいただいたのです」、こう語つておられる。それを深い感銘をもつて、親鸞聖人は、よく見、聞かれたわけです。

その親鸞聖人がやがて何年か後に、「大無量寿経」を丁寧に見つめ時をお持ちになつたと思えます。そうすると「十方恒沙の諸仏如来、みな共に無量寿仏の威神功德不可思議なるを讚嘆したまう」と、「大無量寿経」が諸仏称名の願の成就を説いているその事実について、法然上人のような学徳優れた立派な方も、あるいは悪に悪を重ねた耳四郎という強盗殺人犯も、粗末な人生を送っている陰陽師の阿波介も、鎌倉の武士たちのように戦場でむごい人生を生きてきた人たちも、滅ばされた平家の人も、滅ばした源氏の者も、同じように本願が我らを救うてくださるのだとい

うその喜びをいただき、それを語り、おおらかに南無阿弥陀仏と念仏して生きておられるではないか。その事実を「大経」が、諸仏称名の本願の成就として教えてくださっているのか。このようにご理解になるのですね。

ともかくよき人たちの教えを聞いて、私に「念仏申さんと思いつ心」が起こってくるのです。「念仏申さんと思いつ心」が、よき人たちの教えを聞いて私に湧き起こってくるのだけでも、それが如来の本願が私の上に現れ出てくださった体験であるのかと、こう承知していくのです。本願をその成就において語れば、この世の出来事であり、自分の体験なのです。諸仏称名の願の成就である「よき人」の教えによって、念仏申さんと思いつ心が起こるといふ体験を、親鸞聖人が持つていかれました。その体験に立って「大経」を読むならば、諸仏称名の願の成就と至心信楽の願の成就とは、親鸞聖人その人が、暗い迷いの人生を越えて明るい如来の光を体験し、その喜びを「南無阿弥陀仏」と念仏する姿で表していく、親鸞聖人における信心の確立は、このようにして起こった出来事であるということ、聖人によく教えた大切な「大経」の言葉であると理解されるのです。よくよく案じみれば、必至滅度の願は、信心を獲た人を現生に正定聚の位に立たしめる本願ですから、諸仏称名の願と至心信楽の願の成就を説く教言は、親鸞聖人その人における信心の確立を、こういう出来事を私は体験したのかと教えたものであるとすれば、この必至滅度の願の成就を説く教言は、親鸞聖人がお立ちになった自覚道は、本願に目覚め、光の中に生きる身に目覚めて生きていく人生でありますけれども、それは現生に正定聚の位に立って、必ず無上涅槃の証りに向かって生きられていく人生にほかなりませんし、これがあなたに実現した

のだと教えている教言です。このように、本願の成就を説く教えの中の、諸仏称名の願の成就と至心信楽の願の成就を説く教えによつて、親鸞聖人は信心の獲得はこういう出来事であるのかということを、はつきりと承知していくことができたに違いありません。

そのようにして念仏する者となり、如来の大悲の中に生きる喜びを得た親鸞聖人が、そこからどういふ人生を生きていかれたのか。これを意味深く教えているのが、必至滅度の願の成就を説く教えである。大体、こういうような読み方を、聖人はしていかれたと考えられます。

五. 大経往生

「大経」を読むと、往生を遂げていく人が三種類あると説かれています。これは大切な教えですが、親鸞聖人はそれ以上に、今の本願の成就を説く三つの教言に、決定的に大切な「大経」の教えをいただかれたのです。聖人自身が人生に迷い、苦しんだ。その自分が法然上人の教えに遇つておおらかに念仏する者となった。そして後の「歎異抄」が伝えている言葉で言えば、「念仏者は無碍の一道なり」という信念を恵まれた人になっていった。そのことを「大経」は、「本願の成就」として教えてくださっている。してみると、自分にとつて「大経」の中の一番大切な教えは、先に述べた諸仏称名の願と、至心信楽の願と、そして必至滅度の願と、この三つの本願の成就を説くところにある。こう「大経」を読んでいかれたに違いありません。その三つの本願によつて実現する自覚道、それは大悲に目覚め、光明の中に生きる身に目覚めて生きていく道です

から、この深い目覚めに立って生きていくという意味での自覚道を、今申ししている「大経」の下の巻の最初にある本願の成就を説く教えによって、聖人ははつきりと知られたのです。それを自覚的に思想化して、「大経往生」という名で呼ばれる自覚道へと鍛えていかれたのであると思われる。

「証巻」は必至滅度の願とはどういう本願であるかを、因願と成就の両面から明らかにしております。その必至滅度の願によって実現する自覚道を難思議往生と呼び、これはどういうものであるかを主題として考察を展開していくのが、「証巻」のテーマなのです。そこで聖人は、こういうことを言われます。「証巻」のはじめあたりに、真実の証と自分が言うのは、もちろん「無上涅槃の証り」を言うのだけれども、真実の証というのは、到達点にある無上涅槃の証りを言うだけではなく、その如来の証りである無上涅槃に向かって生きていく道程もまた、真実の証の具体的なあり方として了解するのであると述べられます。

煩惱成就の凡夫、生死罪濁の群萌、往相回向の心行を獲れば、即の時に大乘正定聚の教に入るなり。正定聚に住するがゆえに、必ず滅度に至る。

「煩惱成就の凡夫」というのは、「煩惱にまみれて生きるほかはない私」という意味です。「生死罪濁の群萌」とは、この世に生きて、五濁悪世の無残さが至るところにさらけ出されている、その無残さの中に生きているものという意味です。この世に生きて、誰がきれいに生きることができるであろうか。一人の例外もなく、人はこの世の泥にまみれて生きるほかはないではないか。群萌というのは雑草ですから、そういう雑草のように生きる我々が、しかしながら如来の往相回

向の恩徳を自証する本願を信じ念仏する者に、よき人の教えに育てられていくことができらば、つまり本願の呼び声がいきいきと感じられる「念仏申さんと思いつ心」が私に起きた時に、即時に大乘正定聚の数に加えられるのである。正定聚に住する者となったのであるから、そこから滅度すなわち無上涅槃の証りに向かって生きていく大切な一歩一歩の人生が、必ずそして自然に始まってくる。これが「真実の証」の具体的なあり方である、この了解を述べられた、まことに意味深い親鸞聖人の信念の表明です。これが親鸞聖人がおっしゃる「無碍の一道」であり、これが浄土真宗なのです。こういう自覚道を浄土真宗として、聖人は繰り返して語られるのです。

聖人の晩年に、「唯信鈔文意」というお聖教が書かれます。それによりますと、本願に目覚め、自力の心が捨てられる時をいただいたという体験が「回心」なのですが、この回心という体験を持ったとき、そこから始まる人生が、次のように述べられています。

ひとすじに、具縛の凡愚、屠沽の下類、無碍光仏の不可思議の本願、廣大智慧の名号を信樂すれば、煩惱を具足しながら、無上大涅槃にいたるなり。

こういうおらかな信念が述べられるのですが、私たちはこれが浄土真宗であると聞き取っていただくことができます。「証巻」の文章とこの「唯信鈔文意」で述べられている論述は、ほぼ同じ内容です。「証巻」には、我々は信心を獲得することによって、現生に即時に、つまり今のこの身のままに、大乘正定聚の数に加えられるのだ。正定聚の数に加えられるからこそ、迷いの人生を越えて、如来の命と言うべき無上涅槃の証りに向かって真つ直ぐに生きていく、こういう感謝す

べき人生が自然に始まってくるのである。これが真宗であると、こうお述べになつて注意すべきことは、この二つの文章には、直接に「往生」が語られておりませんでしょう。

ところが「一念多念文意」という大切なお聖教がありまして、そこに今挙げた至心信樂の願の成就を説く「大経」の教言が、解説されているのです。

あらゆる衆生、その名号を聞きて信心歡喜せんこと乃至一念せん。至心に回向せしめたまえり。彼の国に生まれんと願すれば、即ち往生を得、不退転に住せん。

こういう言葉で念仏往生の願の成就が説かれております。これを解説して、聖人はこうおっしゃいます。

真實信心を得れば、即ち無碍光仏の御心のうちに摂取して捨てたまわざるなり。(中略)おさめとりたまうとき、すなわち、とき・日をもへだてず正定聚のくらいにつきさだまるを、往生を得とはのたまえるなり。

真實信心を得れば大悲の摂取にあずかるのですが、摂取不捨の利益をいただいたということは、念仏申さんと思ひ立つ心が起こつた時、その時自然に、直ちに、正定聚の位につき定まるのです。信心を獲れば正定聚の身となる、これが親鸞聖人の基本的な信心理解ですね。信心を獲れば正定聚の身となる。そして必ず滅度すなわち無上涅槃の証りに向かつて生きていくという、意味深い人生が始まり、生きられていくのだけでも、それを「大経」は「往生を得」と教えてくださつていて、こういう解説です。自分は信心の獲得によって、念仏の身となつた。その念仏にたまわる真實功德によって、自然に流転する人生をひるがえして、正定聚の数に加えていただいたとい

う喜びと感動を持つただけでも、そこから始まる「無碍の一道」を大切に生きるといふ人生を、「大経」は「往生を得る」と教えてくださっている。自分が体験しているのは、正定聚の身となり涅槃道に立ったという信念ですけれども、「大経」はこれを「往生を得」と教えてくださっている。自分は真実の教えを「大無量寿経」に聞くものであるから、「大経」の仰せのままに、正定聚の身となって無碍の一道を生きたという大きな恩恵をいただいたその命の歩みの全体を、「往生を得」、すなわち往生の一道に立ったといただいでいくのである。こういう了解です。

信心の獲得が実現する生存は、「住正定聚必至滅度」する実存なのです。しかしそれを「大経」によれば、「得往生」と教えてくださっている。往生とはこういうことなのか、こういう感動が湧いてきます。聖人は正定聚を往生だと主張なさるのではないのです。「大経」がそう教えてくださっている。その「大経」の仰せのままに、「これが往生なのか」といただければかりである。このようにして「大経」の教えによって自覚的にいただいた、そしてそこに立って生きていくと願う往生であるからこそ、「大経往生」と聖人はご了解になり、こういう名で、今申したような涅槃道に立った自覚を表しながら、これを往生の最も大切なあり方と了解して、それを身をもって生きていきたいと願われたのです。こういうようにして、聖人が「大経往生」という名で呼ばれる独特の往生理解が、命終わって後に浄土に生まれていく往生、それもまた大切な往生理解ですけれども、それに止まらないで、往生は信心の獲得によって現生に無碍の一道に立った、その無碍の一道を大切に生きていく歩みを、往生する人生といただくのだ。こういう形で、独自の往生理解が確立してきたことであります。

六、浄土の功德を体験する人生

聖人は、大変粘り強い思索を展開なさった方のように見受けられます。体験しているのは正定聚に住して無碍道を生きるという人生ではありますが、なぜそれが「往生」と教えられているのであろうか。無碍の一道に立って生きる人生は、どのような意味で「往生する人生」ということができるのであろうか。これを尋ねていかれるのです。その時に聖人は、次のような了解を切り開いていかれたのです。正定聚の位に立った人生は、実はその信心において、浄土の功德をいきいきと体験しているのだ。こういう浄土理解です。

「正信偈」の中で親鸞聖人の信念を最も力強く述べている言葉として、「能発一念喜愛心 不断煩惱得涅槃」がございます。煩惱を断ぜざれども、涅槃を得る。それは『唯信鈔文意』にいう、「煩惱を具足しながら無上大涅槃にいたる」と同じ見解だと了解していいかと思いますが、「不断煩惱得涅槃」というのは、実は曇鸞大師が浄土とはこういう世界だとお述べになる、その言葉なのです。浄土は、どんなに煩惱にまみれた者であっても、一たび浄土の命を得れば、煩惱を断ぜずして涅槃の道に立つ。そういう大切な功德が今現に働いている世界を、浄土と呼ぶのだ。これが曇鸞大師の大切な教えです。その浄土の働きである「不断煩惱得涅槃」の働きを、親鸞聖人は「能く一念喜愛の心をおこせば、煩惱を断ぜずして涅槃道に立つ」と頂かれました。ですから聖人は信心のところで、浄土の功德をいきいきと体験なさっているわけです。だから浄土は、西

の遠い彼方にあつて、命の故郷として思慕し、帰りたいと願う世界であると了解されるだけでなく、信心を得れば、信心に浄土が開かれ、浄土の功德が信心を場としていきいきと働いてくるのだと、聖人は了解なさつたと考えられます。曾我量深先生はそれを、念仏して浄土に行くのではなくて、念仏する人には浄土が来てくださるのだと、素朴な表現ですけれども、はっきりとおっしゃっていました。浄土の功德をいきいきと体験する。正定聚とはそういう人生ですから、正定聚に住した命は、浄土の功德をいきいきと体験している生存であり、浄土が開かれた人生を生きているのだと言つてよいのでしょうか。そういう人生を「往生」と呼んで、何のためらいがあるのか。こういう形で往生の意味が換骨奪胎され、新しい了解がそこに展開してきたと思われれます。

「真仏土巻」に聖人は「往生」について、次のように述べられます。

往生と言うは、『大経』には「皆受自然虚無之身無極之体」と言えり。【論】には「如来浄華衆 正覚華化生」と曰えり。または「同一念仏して無別の道故」と云えり。また「難思議往生」と云える、これなり。

ここに引かれている「如来浄華の衆は、正覚の華より化生す」というのは、世親菩薩によつて眷属功德と名づけられた、浄土の功德です。浄土のたくさんの功德の中から、往生にかかわる功德として、ここに「眷属功德」があげられていることに、私は注意したいのです。浄土に生まれるということは、浄土の家の家族というか、如来の家の家族に加えられるということなのだと思われています。このことが往生に、とても大切な内容を与えているのです。あなたには家族がありますか、こう問われればどうでしょうか。肉親の家族は勿論ありましようが、しかし本当に兄

弟、同朋という言葉で表されるような、如来の命をとにも生きているのだと言われるような本当の友を、あなたは持つておいででありますか。こう自分に問えばどうでしょうか。悲しいけれども、私は孤独だ。一人でこの五濁悪世を生きていかなければならない。こういう厳しさが、いつも身を責めるのです。孤立無援の孤独の中に投げだされ、それに堪えながら、私は人生を生きていかなければならないのだけでも、しかしながら今、そういう私が本願を信じ念仏することによって浄土の家族に加えられ、本当の兄弟であるかのようなあなたたかい命の触れ合いを体験することができると、こうおっしゃるのです。だから往生の一道に立った者は、浄土の眷属、つまり如来の家の家族に加えていただいたのだ。その喜びをいま生きている人生の中で、自分の大切な生き方として、ともに生活する親子兄弟からはじめて、皆が孤独の人生の悲しさに身を責められながら生き合っているのだけでも、その無残さを超えて、あなたもまた如来の家の兄弟となり姉妹となられた方かと、その喜びを一人ひとり確かめていきたいのです。そういう願が動くのですけれども、その願を自分の大切な願と承知して、現実の人間関係の中で、それを大切に生きていこうと願うのが、「往生」の大切なあり方だと聖人は尋ね当てられたのです。そうなるということは「往生」というよりも、むしろ「願生」という方が適切となってきます。

親鸞聖人は、「友の同朋にも懇ろの心を持ちあおう」、励ましあい、互いに師弟となりおうて、ともに苦悩に満ちた迷いの人生を超えていこうと語られます。このような大切な同朋というか、本当の友を見いだして、共に生きようとする人生の歩み、これが信心の獲得によって現生に正定聚のくらいに住した人に生きられる自覚道の具体的なあり方であるとし、これを「大経往生」と

する往生理解にまで、聖人は到達なさっているのです。こう了解された往生は、完全に現生の自覚道でしょう。だからそれを肝に銘じて了解し、往生を死んでから後だというような了解だけに追いやってはならないと思います。今の人生の中で、念仏の身のところに、こういう豊かな往生の自覚をしつかりといただいて、その願に自分の大切な人生を捧げていこうではないか。こういう自覚道を聖人はさらに、「これを難思議往生ともうすなり」と示され、この「難思議往生を遂げんと欲う」という意欲として、聖人は仏者としての志願を表明されたのです。そしてこれが、聖人がお立ちになった大乘の仏道としての「往生」の大切な内容である、こういうように私は、聖人から励ましをいただくことであります。そういうことが、聖人の往生理解の要であるに違いないと、私は了解していることでございます。

一応これで終えさせていただきます。有り難うございました。